

## NAさんへのインタビュー（no. 001）

### 1. はじめに

私は、社会福祉学科のNAさん（女性）にお話を聞いた。NAさんとは、以前私が所属していたサークルで知り合い、辞めた今でも付き合いがある。そのサークルは、子どもと一緒にハイキングやキャンプに行くボランティアサークルだ。NAさんは、就職活動をまだ始めていない。それは、NAさんが就きたい職業が、知的障害者が働く作業所で彼らを支援するという仕事である。だから、一般企業の就職活動を行っていないので特殊な話であると考えることができる。が、基礎のやり方は同じであると思ったのでインタビューをした。

### 2. インタビュー内容

- ① 「今では本やインターネットでもよく見る『自己分析』は行いましたか？」という質問に対してNAさんは「していない」と答えた。私は、社会福祉学科の学生の大半が一般企業に就職活動する中、この職種を『自己分析』をせずに選んだ理由を聞いた。するとNAさんは以下のことを話してくれた。

最初は児童支援を職にしようと考えていた。サークルでの活動の影響だと考える。知的障害者に対してあまり良いイメージはなかった。しかしある施設に2週間実習に行った時、考えが変わった。施設の雰囲気がよく、職員が生き生きと働いていた。しかし、障害者はものを作るにしてもあまり上手に作る事ができない。会話ができない人がいた。やはり障害者と関わるのは大変と感じた。そんな中、ある職員の言葉を聞きこの職種に決めた。それは、「障害者一人一人を一生懸命に理解して支援する。それが私たちの仕事だ。」という言葉だ。その言葉通り、この施設では職員が本当に一人一人を理解しようとし、支援していた。今の社会ではこの言葉は理想にすぎず、実際は賢かったら、資格を持っていたら、綺麗に作れたら良いと考えられている。この言葉に感動し、この仕事に就きたいと思った。

一人一人を大切に思っている社会で、たとえ障害者の方が何を考えているか分からなくても、支援できることにやりがいを感じると考えている。障害者には、会話が可能で「どこが障害者？」という人から話すことができない人まで幅広くいる。が、この施設では彼らを理解するためにコミュニケーションが工夫して行われている。例えば、話せない人に質問してその人が笑ったら「yes」、笑わなかったら「no」の合図としコミュニケーションが取られている。

この経験を踏まえ、NAさんは、一人一人を大切にすることのような施設で障害者の支援をする仕事をしたいと思った。

- ② 「今は就職活動のために何か活動していますか？」という質問にNAさんは、「はい」と返事だったので詳しく聞いてみた。

社会福祉法人のグループホームに泊まるアルバイトをしている。そのアルバイトは単に泊まるだけではなく、日常生活の支援を行っている。たとえば、食事の準備の補助やお風呂の準備である。このアルバイトを通して実際に障害者と関わることでコミュニケーションの取り方を学んでいる。

- ③ 「企業・業界研究はどのように行っていますか？」と聞くと以下のように答えてくれた。

インターネットを使うのではなく、大学の先生（特にゼミの先生）からの情報を利用している。就職活動をする上で支援方針を重んじている。人は人として扱われるべきだから「人」として支えるようなところで働きたい。しかし得た情報と実際が違うかもしれない。そこで他大学・施設とのつながりがあるので大学の先生から正確な情報を教えてもらう。さらにこの業界では就職する際、先生のコネが絶大な効果を発する。だから先生に自分の希望や考えをすべて伝えている。また夏以降には各都道府県の福祉団体が行うセミナーが開かれる。これらを利用して就職先を考えている。

- ④ 最後に私は「就職活動をする上で気をつけていることはありますか？」と聞いた。NAさんは、「『一人一人を大切にする。理解する。』という福祉をする気持ちは忘れないようにしている」と答えてくれた。

### 3. まとめ

インタビューをすることが大変であることを実感した。聞きたいことを的確に質問しているつもりでもなかなか相手に伝わらず、NAさんに質問の意図を考えさせてしまった。また、その業界についての下調べも必要だったように感じた。福祉業界は特殊なので特にそう思った。

インタビュー内容に関しては、NAさんは特殊な例なので一般企業の就職活動とは違う点が多いと思った。が、自己分析をせずに職種を決めた過程は一般企業に就職活動をする私たちにも同じことがあり得ると考える。「この職種にしよう！」と決定づけるきっかけは自己分析だけであるわけではなく、実習によって決まることがあるとわかった。私たちの場合でいうインターンシップがNAさんと実習と同じようなものと考えられる。

自己分析をすれば良いというわけではないことがわかった。しかしNAさんのようなインパクトのある体験を受けることができるわけではない。NAさんも実習で決定づけるものがあつたから良かったと言っていた。だから自己分析ですべて決まるわけでないがしておく方がよいと思う。

## NBさんへのインタビュー (no. 002)

### ① 対象者

- ・ 龍谷大学国際文化学科 4 回生 NBさん 女性
- ・ 母親の友人のお嬢さん
- ・ キャリアアップを支援するサークルに所属
- ・ 内定 2 社 (IT 企業と地方銀行)

### ② インタビューの内容

#### 1. 業界・企業研究や企業選択について

NBさんは、業界・企業研究は年内に行われたリクナビやマイナビなどが主催している合同説明会に参加して情報を収集した。そこでは、数多くの企業が説明会を開いているため、興味があるところはもちろん、興味がないところの話も聞きに行ったそうだ。そこで話を聞くことにより、会社が自分に合うのかどうか絞り込めた。さらに企業自体が主催した説明会で社員に自分の疑問に思っていることを投げかけた。また、プレエントリーをしてとにかく資料を得たそうだ。周りの人は、100社以上だったのに対して、NBさんは90社前後だった。それは、NBさんの中で軸が既に出上がっていたからだ。一生働くことができ福利厚生が整っていて女性に対して公平な待遇である会社がいいと思っていた。そのために業界対策本を読み多くの知識を手に入れた。インターンシップは、その企業に行きたいのであれば価値を発揮するが、たとえ業界が同じだとしても別会社であれば逆効果になる。インターンシップをすることはマイナスな面ばかりではないが、無駄に面接で話す必要はないとおっしゃっていた。しかしまだどの業界がいいのか迷っているならば、行って自分に合うかどうかを確かめるにはチャンスである。このような手段で自分に合う業界・企業を探し選択した。

#### 2. 面接について

どの面接でも、必ず志望動機と自己PRと学校で頑張ったことについて聞かれた。それは、エントリーシートに書いてあるままに答えたそうだ。一次面接に関しては、集団面接であったことが多く、5人で30分や6人で1時間だったという。そのため、自分をアピールしたいがために多くの時間を費やす人もいた。しかし、その人は「空気が読めない人」ということで真っ先に選考から落ちるそうだ。1次面接では1~2分くらいで簡潔にまとめて話す必要がある。NBさんが印象に残った質問がいくつかある。そのうちの1つは、「自分を物で例えると何か？」という質問だ。「納豆です。なぜなら粘り強いから。」という答えはベタであるため、工夫しなければならない。ま

た、「周りの人からの評価」についても聞かれたそうだ。他己分析が発揮された。面接の段階があがるにつれて、自分が話したことに対してつつこんでくれるらしい。だから、志望動機・自己 PR・学校で頑張ったことに関してはどんなに詳しく聞かれても大丈夫なようにしておく必要があるという。

### 3. 今後就職活動をする私たちに対するアドバイス

今のうちから自己分析をする必要がある。そして実際にキャリアセンターに行き、エントリーシートを見て質問の答えを考える。一度書いてみることにより、就職活動についてイメージしやすくなる。また、就職活動の流れはきちんと押さえておくことが重要だ。さらに夏休み中に筆記試験対策（SPI）をしておくといらしい。それは、後になればなるほど時間がなくなるからだ。一方で友人との交流も大切だそうだ。自己分析をして一度書いてみた履歴書・エントリーシートを見せることにより、自分の気付かなかったことについてアドバイスをもらったり情報交換を行ったりしたらしい。友人との会話によりストレス発散できたりもするため、友人との関係は重要な役割を示す。

### ③ まとめ

今回のインタビューでは、本やインターネットでは知ることができないことについて聞いた。NBさんの場合、他の人に比べて早めから就職活動の準備に取り掛かっていたにも関わらず、もう少し早く始めれば良かったと後悔していた。それを聞き、今から準備を始めることは決して早くはないと思った。特に自己分析はエントリーシートのためだけでなく、就活が終わるまで続ける必要があるそうだ。それは、落とされた場合、自分に何が足りないのかを繰り返し見つめなおす必要があるからである。私は、今から徐々に自己分析・他己分析をしたいと思う。また、就活中も友人と集まって話したりすることが大切だそうだ。

## NCさんへのインタビュー (no. 003)

### ① 対象者

- ・同志社大学 社会学部社会学科 4回生 NCさん 男性
- ・友人の友人
- ・陸上をするサークルとアダム祭の実行委員
- ・内定1社 (教育系)

### ② インタビュー内容

#### 1. 業界・企業研究や企業選択について

NCさんは、11月末から就活を始めたそう。本格的に始めたのは2月中旬と一般に比べてやや遅めである。それは、アダム祭実行委員を10月末までし、しばらく何もする気にならなかったからだという。しかしアダム祭とフレキャンがきっかけで自分のしたいことが確立した。それは、「学生と関わることがしたい」ということだ。だから、自己分析では「将来やりたいこと」はみつかっているため、行きたい所に自分が適しているのか、本当にやりたいことなのかをみつめるために行ったらしい。一方で、面接では企業に「合わせた」自分をみせると、ぼろが出てしまう。だから面接よりも前にきちんとありのままの自分と向き合うことが必要であるという。自分のしたい仕事の軸が決まっていたため、その軸から発展させてエントリーシートを出したらしい。企業研究は、11月末に行われた合同説明会に参加することから始めた。合同説明会に参加して、資料をもらい、情報を多く得た。また、気になる企業やより知識を増やしたいと思った会社については、採用ホームページによって知識を増やした。今回内定が決まったところは知人の方が勤めているのでいろいろと話を聞いたそう。しかし、他の企業についてもOBOG訪問をすれば良かったと後悔していた。

#### 2. 面接について

面接はエントリーシートの延長というかんじらしい。だから、いくらエントリーシートに企業に「合わせた」ことを書いても、面接ではありのままの自分が出てしまうので嘘がつけない。また、不思議に面接官が思ったことに関してはつつこまれてしまう。変に誇張しすぎるとつつこまれて慌てふためいてしまう。集団面接の際、「前の人の意見に対してどう思うか？」という質問をされたらしい。自分では、話をしっかりと聞いているつもりであったが、いざ意見を聞かれるとすぐには答えることができなかったそう。それは、次に自分が言うことを考えていたため、それが脳内の大部分を占め、他人の話を話し半分聞いてしまっていたからだという。だか

ら、自分の心にある程度のゆとりをもって面接に臨むべきである。また、インターンシップについてむやみやたらと話す必要はない。それは、「他企業にインターンシップに行ってなぜうちには来なかったの？」という質問をされてしまうからだ。社会に関わる経験としてはいいが、面接の話のネタにはあまりしない方がいいらしい。

### 3. 今後就職活動をする私たちに対するアドバイス

NCさんは、3つのアドバイスをくれた。1つ目は、常に前向きであるということ。就活ではうまくいくことよりも、いかないことの方が多い。だから自然と焦ってしまったり、不安になってしまったりしがちである。結果、マイナス思考になる。しかしそこをなんとかプラスに変えて、取り組む方が就活に良い影響を与えるそうだ。2つ目は、謙虚さを失わないということ。面接を受ける際に、「俺は/私は、ここを受けてやっている」という気持ちでは受からない。そのような気持ちは自然と滲み出ている。企業に対して「上から目線」になってはいけない。3つ目は、一人で就活をしないということ。就活中は、忙しくてなかなか友達とも会えない。しかし、時間を合わせたりして情報交換や息抜きをして歩幅をあわせることが大切だという。

#### ③ まとめ

NCさんは将来のやりたいことがはっきりしていたので、軸を確立することができた。軸を確立するためには、自分をよく知る必要があると思う。NCさんに聞いたところ、自分を見つめなおすためにスケジュール帳や日記を見直してみるとありのままの自分分かるそうだ。私は、スケジュール帳とかを見直して自分自身を見つめなおしていきたいと思う。さらに3つのアドバイスに気をつけて就活に取り組みたい。

## NDさんへのインタビュー (no. 004)

### ① 対象者

- ・甲南大学 文学部 人間科学科卒業 NDさん 女性
- ・社会人1年生
- ・母の友人のお嬢さん
- ・ボランティア活動（児童養護施設）3回生～4回生 ゼミ長（ゼミのリーダー）
- ・内定2社（アパレル、衣料卸売業）5月上旬には終了

### ② インタビュー内容

#### 1. 企業選択について

もともと大学院に行こうと思っていたが、悩みに悩んだ挙句、就職することにし12月から活動を始めたそう。まず情報サイトで自己分析をしたが、自分の中で既に軸ができあがっていたのであまり参考にはならなかったという。また適職診断に関しても同じことが言える。NDさんは、①近畿で働けるところ②人と接することができる仕事③馴染みのあるところに就職したいと思っていた。だから、普段から利用している興味をもっていた百貨店やプランナーという役目をすることで人の支えになれるということを情報サイトで知ったブライダルにエントリーを出したそう。しかしあまり思うように進まず、人と接することができるアパレルの店舗販売員にもエントリーを出し始めたという。

#### 2. 面接について

1年経った今でも覚えている質問が2つあるという。1つ目は、「自分を動物に例えると何か？」という質問。これに対してNDさんは「リス・・・人間観察が好きでいつもきょろきょろしているから」と答えたそう。2つ目は「当社が内定を出したら必ずきてくれますか？」という質問だ。ここで正直に「最終面接まで行っているところが他にもある。どこが第1志望というわけではないのでまだ分からない。」と答えたらしい。結果、その企業から内定を頂けたそう。正直に答えることも必要である。

#### 3. 実際に働いてみて就活中に得た情報と食い違うところ

研修として正社員になる前（4回生の8月）から週3から週5のペースで働いていたのである程度の仕事については分かっていた。しかし正社員として働き始めて戸惑うことがいくつかあったらしい。

- ・給料・・・税金や制服として支給される服代などで引かれるから本当に低いらしい。  
給料はやる気につながるの辛い。

- ・ボーナス・・・不定期に昇格試験（売上＋接客態度）が行われる。それでステップアップしなければボーナスなし。
- ・サービス残業・・・お金がつかない残業のことをいう。
  1. お客様がたくさん来られているとき
  2. DM書くとき（季節ごとに20枚ぐらい）（休憩時間＋家＋電車）
  3. 月1のミーティングで1時間を超えた分
  4. その他プチミーティング
- ・内容・・・先輩ばかりの職場だから雑用はすべてするから、売上（個人あたり）が低くなってしまう。

#### 4. 私たちへのアドバイス

早くから就活を始めるからといってうまくいくわけではないという。だから就活をする時は、メリハリが必要であるようだ。NDさんは、月に1回友達と遊んで情報交換や愚痴を言ったりしたり、ゼミ活動も活発にしたりしていた。しかしその分就活をする時は、集中して行った。NDさんの場合、ゼミと就活のバランスがうまく保てていたからだと考える。また、人にもよるけれど、エントリーは広く多様な種類の業種に出さない方がいいようだ。しっかりと資料を見て、企業説明会を受けてみたいと思うところにしか出さないようにする。そのためには軸をしっかりとつ必要があるという。

#### ③ まとめ

今回インタビューをして、実際に働いてみて就活中に得た情報とは違うところを聞いて良かった。NDさんが、アパレルだから特に重労働なのかもしれないが、「働く」ということは甘くはないということを知った。また、ゼミ長をし、ゼミの活動はすべて出席しながら、就活をしたことに驚いた。NDさんの場合は、うまくバランス取れたからだと思う。就活だけに集中すると気を病んでしまうので、就活とバランスが取れる何かを見つけないと思う。



## NEさんへのインタビュー (no. 005)

### ① 対象者

- ・同志社大学 社会学部社会福祉学科 4回生 NEさん
- ・以前所属していたサークルで親しくしてもらっていた
- ・アルバイトは居酒屋
- ・内定は2社 (UFJのエリア総合職、三井住友海上の一般職)

### ② インタビュー内容

#### 1. 企業選択について

自己分析は常にしていた。お風呂の中や移動時間を使って行ったそう。幼稚園まで振り返ったりもしたらしい。また、絶えず客観的に自分をみるために周りの人に話を聞いた。そして普段自分ではわからない良いところを他者に教えてもらうことで自信を持った。結果、自分のしたいことが少しずつ見えてきた。福祉や教師の免許を持つてはいるが、その仕事をする世界は狭いと感じ、その進路を選択しなかったらしい。NEさんは、多くの人と出会い、刺激を受けることで吸収し活かしていきたいと考えていた。しかし、このように考えるようになったきっかけは、自己分析だけではないという。居酒屋でのバイトの経験が影響している。居酒屋では、幅広い年代、多種に渡る職種・地位の人と話す機会があって様々なモノの考え方を教えられ、刺激を受けることが多かったそう。さらに人の根柢の幸せを支えられる仕事をしたいとも考えていた。衣食住は人々の生活において欠かせないもの。その中で特に興味があったのは「食」だったので、食に関わろうと思った。また、今の生活に欠かせない「お金」にも興味があった。信頼関係でやりとりをする金融は世界が広く感じた。興味のある企業の説明会では企業の雰囲気を知った。それを基にしてエントリーシートを50社ほど出した。最終的に内定を2社から頂き、悩んだそう。1社はエリア総合職として、もう1社は一般として採用された。後者の企業は社員の雰囲気がすごく良かった。しかし自分のしたいこと(地元に戻って、仕事を自分の力で作り出したいこと)をふりかえり、前者の企業を選んだ。

#### 2. 面接について

今、振り返ってみると圧迫面接のようなものを受けたそう。福祉や教員の免許を持っているにも関わらず、一般の企業に就職しようとする事について企業からの質問は各面接であったらしい。ある企業では、「なんで福祉に就職しないの?」と聞かれたので、NEさんは「福祉は世界が狭いと思ったから。」と答えたいらしい。すると面接官はその答えに納得いかないようで「なんで?それ本音じゃないよね?」の繰り返し

でずっと追及されたいらしい。結果、行き着いた答えは「同じ人と関わるとその人の人生について深く考えてしまい、生死が危ぶまれたりしたとき、立ち直れないから。」だ。まるでその場で自己分析をしたようだと言っていた。

### 3. 私たちへのアドバイス

3つのアドバイスをくれた。1つ目は、とにかく動き、そして知ることだ。説明会には行けるだけ行く。そしてそこで自分の納得のいく理由で業界を絞っていけばいいそうだ。そのためには社員と話せると良いらしい。2つ目は、常に素直でいることだ。友達に他己分析をしてもらい、それが自分の納得のいく答えではないかもしれない。しかし、「自分にはそういう面もあり、その子にはそういう風に写るのだ」、とすべてを吸収するつもりでいなければならないそうだ。3つ目は、就活を楽しむということだ。就活では喜ぶことよりも落ち込むことの方が多い。しかし落とされても「この会社は合わなかった。」と思うようにし、モチベーションを下げないようにしなければならない。そして就活はいろんな企業の人と関わることができ、多くの知識が得られ、出会える絶好の機会だ。だから刺激もいっぱいもらえるので、楽しいと言っていた。

### ③ まとめ

今回インタビューして、「就活が楽しい」ということを初めて知った。今までインタビューに答えてくれた人は、そのようなことを言っていなかったから。「就活は楽しい」と思って活動をすると常にモチベーションが高い状態でいれるので、面接ではうまく自分を表現できるのではないかと思う。また、エリア総合職という、やることは総合職とあまり変わらないが、自宅から交通機関で1時間から1時間半の範囲に勤務地という職種を今回初めて知った。転勤がないので女性には打ってつけだと思った。

## NFさんへのインタビュー (no. 006)

### ① 対象者

- ・同志社大学 社会学部社会学科 4回生 NFさん
- ・同じゼミの先輩
- ・アーチェリー部所属
- ・アルバイトはコンビニ
- ・内定1社 (簡保生命の一般職)

### ② インタビュー内容

#### 1. 業界研究・選択

就活を始める際、始めに自己分析をしたそうだ。そのために今までの自分の人生を振り返ったらしい。それに加え、仲の良い友達に他己分析をしてもらい、自分の長所や短所を知ることができた。その長所や短所を裏付けるエピソードをさらに思い返し探したそうだ。その結果、人を喜ばすことが好きだということがわかった。それは、人の笑顔をみたいからだ。そのためエントリーシートは、TV局や食品メーカー、おもちゃメーカーなどNFさん自身に関わりのあるところを50~60社出したらしい。特におもちゃメーカーは興味がとてもあり、企画職に配属されておもちゃを作りたいと考えていたらしい。業界研究は、自分の興味のある業界の各企業にはどのような違いがあるのかを調べることから始めたそうだ。実際に説明会に行き、社員と話したりしてその人の雰囲気を感じたらしい。社員の雰囲気を感じることでその企業自身の雰囲気も自ずと伝わってくる。だから、そこで自分が感じたものを信じて業界選択をしたそうだ。

#### 2. 面接

NFさんは、4つ印象的な質問・面接があったそうだ。1つ目は、某食品メーカーでの1次面接のことだ。自分が言うことすべてに対して必要以上に褒められたそうだ。しかし面接が終わりに差し掛かったころ、「でも、君は別にうちじゃなくてもいいのでは？」と言われたそうだ。褒められ続けた挙句そのようなことを言われ戸惑ったそうだ。2つ目は、2人面接でのことだ。「自分のキャッチフレーズをすぐに考えて発表して。」という質問だ。NFさんは「都会を終着駅とする普通電車」と答えたそうだ。意味はこうだ。都会のような華やかなところをゴールとして、自分のペースで着実に近づくということを表したそうだ。3つ目は、アーチェリー部について話したときのことだ。面接官に「君はクラブに自分は必要な人材だと思う？」と聞かれたらしい。答えは、必要。なぜなら、試合で応援をするときに一人でも多くいると力が増すからだそうだ。4つ目は、その業界でそこしか受けていない企業の面接での質問だ。「この業界ではうち以外に受けてい

ないよね？うちはたまたま受けたの？」という質問だ。実際はそうであっても、時に偽ることは必要だそうだ。そのためには、ある程度話術は必要とされる。

### 3. アドバイス

就活中は気が滅入ることもあるので、少し時間があれば遊びに行くなど息抜きが必要だ。NFさんの場合はクラブに行って気晴らししたそうだ。落ち込んでいた気持ちも人と話したりリフレッシュしたりすることで気持ちを立て直すことができたらしい。さらに1度きりの就活なので後悔しないように大会社でも諦めずに一歩踏み出さなければならない。面接では、元気さと笑顔が大切である。また、エントリーシートに書いたことを暗記するのではなく、ポイントを絞って説明できるようにしておく必要がある。さらに面接では時間が限られているため、日頃から短く話すようにした方がいいそうだ。

#### ③ まとめ

今回インタビューをして、確かに一度きりの就活だから、どんなに難関とされている企業でも興味がすごくあるのならば、エントリーシートを出さなければならないと思った。あとから後悔しないように、一歩踏み出す勇気が必要と感じた。また、面接に備えて、要点をまとめて話すことは今からでも始めることができるのではないかと思った。そのためには、話す前に自分の言いたいことのポイントを一度整理しなければならない。まずは、自己分析とそのようなことをしていきたいと思った。

## NGさんへのインタビュー (no. 007)

### ① 対象者

- ・同志社大学 社会学部社会福祉学科 4回生 NGさん
- ・友人の友人
- ・サークルには特に所属していない
- ・内定2社（京都信用と京都銀行）

### ② インタビュー内容

#### 1. 企業・業界研究や企業選択について

NGさんは、特に自己分析をしなかったそうだ。しかし、面接やエントリーシートを書くために多少はしたらしい。プレエントリーでは、とにかく興味をもったところに出した結果、100社以上になった。

様々な説明会に行って、その企業が業界でどのような位置にいるのか、どのような社会貢献をしているのかを中心にメモをとったそうだ。また、その説明会で社員との座談会を通して「この会社イイことしているなあ」と率直に伝わってきたらしい。これらの結果、最終的に50~60社の食品メーカー・銀行・カード会社・トイレタリーメーカーにエントリーシートを出した。

志望理由は、以下の通りである。食品メーカーは、栄養のある食べ物をみんなにとって欲しい、家族みんなで食事を囲んでほしいと思ったから。金融は、説明会に行くまでは「しんどそう」のようなタブーなイメージがあったが、行って話を聞いてみて、人のライフプランを立てる仕事をしてみたいと思ったから。トイレタリーメーカーは、日頃から誰もが利用し、自分自身の身近にあるのですぐに商品を愛し、仕事に打ち込めると思ったから。

#### 2. 面接について

面接での印象に残る質問は3つあると答えてくれた。

1つ目は、「10年後うちの会社に君はどんな利益をもたらしてくれる？」という質問だ。NGさんは、結婚しても続けるかどうかはまだ決めていなかったのでも、少し質問に戸惑ったらしいが、自分が働き続けたらということを考えて答えたいらしい。

2つ目は、「支店訪問しましたか？」というものだ。金融系では、支店訪問をさせてくれるそうだが、NGさんはその銀行の支店は訪問していなかった。だから、正直にしていないことを説明したそうだ。

3つ目は、同じ業界内の他企業と比較した質問だ。例えば「なぜ〇〇は受けなくて、

うちを受けたのですか？」といったものだ。そこは正直に答えたい。

面接では、事前から「こう答える」と決めたり、暗記したりせずに、軸のみを定めてその場で一生懸命に考えるようにしたと言っていた。

### 3. アドバイス

NGさんは、合同説明会はそんなに行かなくても良いと言っていた。なぜならそこには多くの企業があるので一つの会社の説明を深く聞くことができず、疲れてしまうだけだからだ。しかし行ってみんなの就職活動の雰囲気を感じ、やる気を出すことができたそう。だから度々行く必要はないが、1回は行った方が良いかもしれないと言っていた。

NGさんは、学内セミナーが役に立ったと言っていた。秋に開かれたオリエンテーションではOBの社員の生の声を聞くことができ、各企業の情報を得ることができたそう。

面接では、最後に「何か質問ありますか？」と聞かれることが多いらしい。そこでありきたりな質問をするのではなく、自分なりの質問をすることでアピールできたと言っていた。例えば、メーカーのある商品について聞いたそう。

### ③ まとめ

インタビューにも少し慣れてきて、落ち着いて質問をできるようになってきた。しかし相手の話になり夢中になりメモを書き忘れそうになったりすることが多々あったので今後注意したいと思う。

今回のインタビューに関しては、今までの人とは違う話も聞くことができて良かった。合同説明会をとにかく行った方が良いと言っていた人もいたが、今回のようにあまり役には立たなかったという意見もあったので、私たちは闇雲に参加するのではなく、考えて参加しなければならないと感じた。

## NHさんへのインタビュー (no. 008)

### ① 対象者

- ・同志社女子大学 現代社会学部 こども学科 2009年卒業 NHさん
- ・以前入っていたサークルでの先輩
- ・サークルは子どもとキャンプやハイキングに行くボランティアするサークル
- ・内定4社 (アパレル業界)

### ② インタビュー内容

#### 1. 企業・業界研究や企業選択について

NHさんは、アパレル業界に非常に興味を持っていた。それは、アルバイトでアパレルショップに勤めていたことが要因と考える。

アパレル業界においても様々な企業がある。NHさんは、就職活動サイト・各企業のホームページ・実際に営業店に足を運んだ。そして色んなお店を見比べた上で6社にエントリーシートを出したそう。

合同説明会には一度だけ行き、周囲の就職活動の雰囲気を感じたらしい。企業説明会は13社行った。OBOG訪問は行っていないが、先輩社員との質問会が企業説明会で設けられていた。NHさんは、そこで仕事の内容やその会社の現状について聞いたそう。

最終的に4社から内定を頂いたが、今の企業に決めた理由は、NHさんが軸にしていた4つの点を果たしているからであった。その4つの理由とは、会社内の雰囲気・会社の考え方・安定性・可能性である。

#### 2. 実際に働いてみて感じることにについて

入社前に店舗見学や質問会が設けられたため、特に大きなギャップを感じることはなかったらしい。また、アルバイトで同じ業界で働いていたため、仕事内容はイメージやすかったそう。

しかし、学生の時は何にも気にせず、自分のペースで生活できていた分、苦勞することは多かった。学生の間は、特に責任を持たなくてもよく、何かに制約されたり、第三者によって目標が定められたりすることがなく、のびのびとできた。

実際に社会人になり、働き始めると学生の頃とは違い、責任を持たなければならなかったり、売上などの数字を気にしなければならなかったりと、辛く感じる人が多いそう。

その分、売上が良かったり、お客様の喜ぶ顔を見ることができたりした時には、とて

もやりがいを感じるらしい。

### 3. アドバイス

NHさんは、エントリーシートを他の人に比べてかなり少なかった。だから内定をもらうことができなかつたらどうしようという不安が常にあったらしい。しかし、自分で自分に自信を持たし、プラスに考えるようにしたそう。マイナスに考えると、それが表情に現れ面接で良く思われなから。たとえ不安であったとしてもある程度プラスに考えることが大切らしい。

また、就職活動は「大変」とか「嫌だな」というネガティブなイメージを抱きやすいが、多種多様な人に出会う絶好の機会でもある。だから就職活動をしていく中で自分自身が成長することができると言っていた。さらに就職活動中も自己分析をしたり、将来について考えたりすることで、自分の成長を実感し就職活動を楽しむことができるらしい。

### ③ まとめ

実際に働いている人にインタビューをしたのは、2回目である。実際に働いている人はお仕事で忙しいため、あまりゆっくりとインタビューできなかつたのが残念である。が、社会人の生の声が聞けて良かった。

NHさんは、最初からアパレル業界に勤めたいという理由のみで、エントリーシートを6社のみ絞ったわけではないように感じた。実際にその店舗に足を運ぶことで、お客様という視点でその店についての情報を得ていた。これはどの業界でもできることではないかと考える。実際にその企業の会社に行き、普段の雰囲気を知ることも大切であると思った。

また、就職活動に対してマイナスなイメージを持つのではなく、プラスに置き換えていくことが重要だと感じた。



## N I さんへのインタビュー (no. 009)

### ① 対象者

- ・同志社大学 社会学部教育文化学科 2009年卒業 N I さん
- ・以前所属していたサークルの先輩
- ・子供と一緒にハイキングやキャンプをするサークルに所属していた
- ・内定3社

### ② インタビュー内容

#### 1. 企業・業界研究や企業選択について

N I さんは、最初から業界を絞るのではなく、本や雑誌で幅広く業界について知識をつけたそうだ。そして各業界で特に興味を持った1社の企業説明会に参加してさらにその業界の情報を得た。企業説明会は、およそ50社行ったと言っていた。

それを踏まえて、企業研究をした。説明会でもらったパンフレットや実際に説明会に行き聞いた話、四季報などを使って自分にとって大切なデータを他者と比較したそうだ。その中でも特に志望度の高い所に関してはOBOG訪問をした。さらにリクルーター面談したり、インターンシップを経験したりすることで、その会社の良いところ・悪いところ、1日の仕事の流れ、やりがいなどについて知ることができたそうだ。

説明会や社員と実際に接することで、会社の雰囲気が自分に合っているのかどうか分かって、とても良かったという。

最終的にエントリーシートはIT・人材・コンサルや関西のメーカー30社弱に出したそうだ。3社から内定を頂いたが、N I さんの軸としている、地元で働ける・福利厚生が良い・若いうちから活躍できる・社員の雰囲気が良いという点から、現在働いているNTTデータ関西というIT(ソフトウェア開発をする)企業を選んだと言っていた。

そんな就職活動で辛かったのは、最終面接で東京まで行ったのに落とされたことだそうだ。

#### 2. 実際に働いてみて感じることについて

自分の軸に合った企業だから、毎日の仕事が楽しいという。しかし、学生の時のようにのほほんと生活ができず緊張感を持たなければならなかったり、責任感が必要であったり苦勞する点が多いそうだ。仕事にもまだ慣れておらず、楽しいけれど大変と言っていた。

また、学生の頃は勉強することが「仕事」であった。しかし働き始めると仕事をするためには、勉強をしなければならなくなった。だから学生のころに比べて勉強すること

が多いらしい。

### 3. アドバイス

自分の軸をきちんと持つことが大切だという。そのためには、自己分析はもちろん他己分析もして、自分の将来をよく考える必要がある。さらにN Iさんは、自分の軸をより明確にするために、最初から先入観を持って業界を選択するわけではなく、多様な業界を見て話を聞くことをしたそう。結果、面接で理由を聞かれた際も暗記などをしなくても自分の言葉で答えることができたらしい。

たとえ周りが就職活動の過程を省略していたとしても、決して流されてはいけない、自分の思いを大切にしなければならない、と何度も言っていた。

#### ③ まとめ

今回で働いている人にインタビューするのは3人目である。実際に仕事をしてどうなのかということについて具体的に話を聞いて良かった。

N Iさんの就職活動の流れは、まるで本に書いてあるものであった。OB OG訪問をしたという人にインタビューをほとんどしていなかったが、N Iさんの話を聞き、OB OG訪問やリクルーター面談の重要性を感じた。また、最初から先入観を持って就職活動をするのではなく、きちんと知った上で業界を絞っていかなければならないと思った。

## NJさんへのインタビュー（no.010）

### ① 対象者

- ・8月上旬に参加したセミナーで講演をしてくださったNJさん
- ・大学名については聞けなかった
- ・ジャズ研究サークルに所属
- ・内定3社頂いた（全日本空輸株式会社、青山商事株式会社、株式会社シャディ）

### ② インタビュー内容

#### 1. 就職活動のスケジュール

3回生の4月に学内のキャリアセンターが主催する就職ガイダンスに参加してから就職活動を意識し始めたという。最初から彼女は、航空業界を強く志望していた。6月には、希望していた企業のインターンシップがあることがわかり、エントリーした。結果、9月にインターンシップをすることができたそうだ。

インターンシップを経験したことで、その業界の人気の高さや倍率を知り、不安を感じたという。そこで彼女は、航空業界のみに絞るのではなく、メーカーや金融・サービス・運輸など様々な業界に計120社へエントリーした。

10月からは企業説明会や合同説明会などに積極的に参加し、情報を入手した。また、それと並行して新聞を読むようにしたそうだ。特に経済紙を読むのではなく、一般紙を読むことで社会全般について広い知識を得ることができたという。彼女は印象に残った記事や希望の業界のニュースをスクラップしておいたそうだ。

1月からエントリーシートの締め切りや面接に日々追われるようになった。就職活動だけに埋没しないようにバイトやサークル活動も一生懸命したという。そのおかげで体力に自信が持てるようになった。

2月から3月にかけて、面接での不採用が続き、選考の合否ばかり気が取られ、自分が大切にしていたことを見失いそうになったという。しかし、そこでネガティブに考えるのではなく、「なりたい、やりたい」という単なるあこがれから、「できること」を考えるようにシフトしていったそうだ。

4月以降は、航空業界に再びチャレンジすることになった。ここで役に立ったのは新聞のスクラップだった。最終的に当初から行きたかった航空業界で内定をもらえた。

#### 2. 就職活動を振り返って思うこと

彼女は、選考の時間に遅れたことがあったそうだ。それは、降りる駅を間違えてしまったせいだ。時間にもっと余裕をもって行動しなければならないと、ひどく後悔したと

いう。それ以後、普段から 15 分前には約束の時間に間に合うよう行動するようになったそうだ。

また、自分と同じ志をもった人と選考の場面で出会えて話すことができるとても楽しかったという。さらに普段話すことのないような人（リクルーターや面接官）と話ができ自分自身が成長したと感じたそうだ。

### 3. アドバイス

まず、自分自身のほぼ全てのことについて、しっかりと論理的に説明できるようにしておくことが大切だと言っていた。そのためには自己分析はもちろん、他者にも分析してもらって、自分の気付かないところを教えてもらうことで自分を知る必要があるそうだ。普段からそれをすることによって、彼女は成長して変化した自分の考え方や感じ方にすぐに気付けるほど観察できるようになった。

そして、新聞を読むことを何度も強調していた。新聞を読むことで、多くの人の考え方、社会全般のニュース、業界とサービス・モノとの関係が分かるという。たとえ圧迫面接をされたとしても、新聞で得たニュースを引用して話すと面接官は、「新聞をきちんと読んでいる子に対して圧迫をするのは失礼だ」と思い、圧迫面接をやめるそうだ。そのためにも新聞は読むべきといえる。

#### ③ まとめ

今回、私は就職セミナーに参加し、そこで講演しているNJさんの話を書いた。インタビューではないが、短時間ではあるが質問をし、とても役に立つ話であったので今回レポートとして提出する。

彼女が言うように、新聞を読むことはとても大切である。新聞を読むことで文章力に多少の影響があるだろうし、社会に広くアンテナを張ることができる。今、私が簡単に始めることができるのは、新聞を読むことだと思う。日々繰り返すことによって習慣になるので、ぜひこれから始めたい。